

Title	English Clefts and Their L2 Development by Japanese EFL Learners
Author(s)	鈴木, 清香
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/45773">https://hdl.handle.net/11094/45773</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	鈴木 清 香
博士の専攻分野の名称	博士 (言語文化学)
学位記番号	第 19600 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	English Clefts and Their L2 Development by Japanese EFL Learners (英語分裂文および日本人英語学習者によるその第 2 言語発達)
論文審査委員	(主査) 教授 春木 仁孝  (副査) 教授 林 良彦 助教授 宮本 陽一

#### 論文内容の要旨

本研究では、日本語とは異なる特徴を持つ英語分裂文の統語構造を明らかにするとともに、今まで研究されてこなかった、日本語を母語とする英語学習者による英語分裂文の習得の面から、母語である第 1 言語が及ぼす第 2 言語への影響について考察する。

従来、英語では焦点位置には 1 つの要素のみが生起できるとされてきた。

- (1)a. It was a book that he bought yesterday.  
 b. \*It was a book with his credit card that John bought.  
 c. \*It was her room to find the picture that Mary cleaned.

(1a)では直接目的語である“a book”、一語のみが焦点位置に生起している文法的な文である。(1b,c)では、目的語 (a book, her room) と“with his credit card (彼のクレジットカードで)”という道具・手段を表す句、あるいは“to find the picture (写真を探すために)”という理由を表す複数の句が焦点位置に生起しているが、どちらの文も非文となっている。Chomsky (1977) は、分裂文の派生には焦点要素に相当する空演算子の CP-Spec への移動が関わっているとし、また Chomsky (1977)、Fukui (1986, 1995)、Takeda (1999) 等においては英語では CP-Spec には 1 つの要素の生起しか許されないと提案されている。

- (2)a. It is [<sub>CP</sub> a book<sub>i</sub> [<sub>CP</sub> OP<sub>i</sub> [<sub>C</sub> that he bought <sub>t<sub>i</sub></sub> yestrday]]].  
 b. \*It was [<sub>CP</sub> her room<sub>i</sub> to find the picture<sub>j</sub> [<sub>CP</sub> OP<sub>i</sub> OP<sub>j</sub> [<sub>C</sub> that Mary cleaned <sub>t<sub>i</sub></sub> t<sub>j</sub>]]].  
 (OP=空演算子)

Chomsky (1977) 等をもとに分析すると、(2a,b)の文法の差を説明することができる。(2a)の場合、a bookに相当する空演算子が 1 つだけ CP-Spec に移動しているため、文法的になっている。しかし、(2b)の場合は her room と to find

*the picture* に相当する2つの空演算子が、1つの要素の生起しか許さない CP-Spec 内に移動したために、非文になったと考えられる。

しかし、ある一定の条件のもとでは、複数の要素が焦点位置に生起できることが、Delahunty (1981)、Nakajima (1994) 等で分析されている。

(3) It was at Knock a century ago that the Virgin appeared to local peasants. (Delahunty 1981: 91)

(4) It was a doll to his daughter, a computer game to his son, and a necklace to his wife that John gave for Christmas. (Nakajima 1994)

本研究では、英語の多重焦点分裂文における可能な組み合わせと不可能な組み合わせを、先行研究をもとにして明らかにした結果、Rizzi (1990) および Cinque (1990) で提案されている referentiality が多重焦点の形成に大きく関わっていることを主張する。Rizzi (1990)、Cinque (1990) に基づくと、event predicate に関与する直接目的語、時・場所を表す句および着点を表す句は referential な素性を持ち、それ以外の要素である方法・道具・手段を表す句は referential な素性を持たない non-referential である。本研究では調査の結果、この referential な素性を持つものが多重焦点として焦点位置に来た場合のみ、多重焦点分裂文が許されると提案する。

また、本研究では、英語の多重焦点の形成には、先に Suzuki and Kitao (2003) で提案した Watanabe (2000) の absorption に基づくメカニズムにより、多重焦点が許されることを主張する。absorption は同じ素性を持っているものどうしで行なわれなければならないという制約から、具体的には、referential な素性を持つ焦点要素の間で素性レベルで absorption が起こり、表面上は複数に見える焦点要素が1つの要素となるため、英語においては1つの要素の生起しか許されない CP-Spec に生起できると提案する。

さらに本研究では、この absorption が(各々の英語母語話者において)分裂文に適用されるか否かで、referentiality によっては多重焦点が許されることを提案する。分裂文において absorption を適用する場合は、多重焦点に相当する空演算子2つがどちらも referential な素性を持っていれば、その2つの要素間で absorption を起こし、2つの素性が1つの要素となるので CP-Spec に存在できる。しかし、2つの空演算子のうち1つが non-referential である場合には absorption が不可能となり、2つの独立した要素のまま CP-Spec に移動してしまうため、CP-Spec の制約に合わず、非文となる。

absorption そのものが分裂文に適用されない場合は、referentiality に関係なく多重焦点自体が認められない。これに関しては、本研究の英語母語話者コントロールグループに対して行った実験結果においても、多重焦点を許すグループ (absorption を分裂文に適用させる話者) と許さないグループ (absorption を分裂文に適用させない話者) の2種類のグループが実際に存在した。

一方、日本語の分裂文は英語とは異なる特徴を持っており、要素の性質に関係なく複数の焦点の生起が可能である (Hasegawa 1997, Koizumi 2000, Takano 2002, etc.)。

(5)a. 昨日彼が買ったのは本だ。

b. ジョンが買ったのは 本を 彼のクレジットカードで だ。

c. メアリーが掃除したのは 彼女の部屋を その写真を探すため だ。

(5b,c)では、英語の(1b,c)と同じ句が複数、焦点位置に現れているが、英語とは異なり、どちらの文も文法的になっている。Takao (2002) は日本語で多重焦点が可能になるメカニズムを、adjunction と scrambling を用いて提案している。

(6) [TP [本を [メアリーに]]] TP ジョンが *ti* あげたのは [本を [メアリーに]] だ]]。

PF deletion

(6)では、まず直接目的語の「本を」が着点を表す「メアリーに」の左側に adjoin し、そこで作られた構成素が文頭に

scrambling する。その後、scrambling された構成素は PF で焦点要素と一致したあとで消去される。このように、Takano (2002) は日本語における多重焦点分裂文は scrambling によって生成が可能になるが、一方、scrambling が存在しない英語ではこれが不可能であると分析している。本研究ではこの Takano の分析に従い、scrambling が日本語の分裂文の生成には必要であるとする。

そこで、この日本語と英語の多重焦点分裂文形成のメカニズムの違いをふまえ、(7)を実験の仮説とする。

(7)初級第2言語学習者は習得の初期段階において彼らの第1言語の文法を使い (Schwartz and Sprouse 1996)、また、日本人初級英語学習者は日本語の scrambling を使うと仮定すると (Kuribara 2000, Miyamoto and Okada 2004)、日本人初級英語学習者は英語においても、分裂文の焦点要素がどのような要素の組み合わせであっても日本語のように文法的であると判断する。

日本の四年制大学及び短期大学で英語を学ぶ日本語を母語とする学習者 124 名 (初級と中級の2つに大きく分けられる) 及びコントロールグループとして 41 名の英語母語話者のデータを分析した。実験で使用した問題数は全部で 120 問。Grammaticality Judgment Task (与えられた文に対して -2 点から +2 点までの5段階の点数を与える文法性判断) を実験方法として採用した。

実験結果は仮説を支持するものとなり、初級においては英語の多重焦点分裂文に明らかな日本語の scrambling の使用が見られた。一方、中級では初級とは異なり、多重焦点を認めない傾向にあることが分かった。

しかし、実験では scrambling 使用の有無を調べるために WH 疑問文もテスト文として与えており、その結果を合わせて分析してみると、中級においても実は scrambling を要素の移動に使用していることが分かった。従ってこの結果は、Kuribara (2000) や Miyamoto and Okada (2004) らを支持するものとなった。

この他、仮説で予測されたこと以外に明らかとなった点として、中級における CP-Spec の性質が挙げられる。中級においては分裂文も WH 疑問文も英語のように1つの要素のみが CP-Spec に存在できると判断していた。CP-Spec 内にいくつの要素が存在できるかに関して、Kuroda (1988) は英語と日本語の違いを挙げ、日本語では CP-Spec において複数要素の存在が認められるが、英語ではこれが認められないという Principle of Forced Agreement Parameter (例えば日本語では文頭に (CP-Spec 内に) 複数の WH 句が現れることが可能だが、英語では必ず1つとなる。) を提案している。従って、実験結果から、中級学習者はすでに英語のパラメータにリセットされていることが考えられる。一方、初級では CP-Spec においては複数の要素の存在を認めていることから、英語のパラメータにはリセットはされていないと結論付けることができる。

また、Schwartz and Sprouse (1996) では、L2 習得の初期段階における第1言語の影響だけでなく、その後習得が進むにつれて第2言語に合わせてパラメータのリセットが行われ、最終的には UG によって制御された第2言語の習得が可能であることも主張されている。従って、本研究における中級でのパラメータのリセットは Schwartz and Sprouse (1996) も支持する結果となった。

以上、本研究では英語多重分裂文の統語的なメカニズム及びその第2言語習得の両方において、いくつかの示唆を与えるものである。

## 論文審査の結果の要旨

鈴木清香さんの学位請求論文 English Cleft and Their L2 Development by Japanese EFL Learners (英語分裂文および日本人英語学習者によるその第2言語発達) は、生成文法の理論的枠組みに基づいて、日本語母語話者による英語分裂文の習得に関する実験を行い、第2言語の習得に対する第1言語の影響について考察したものである。

従来、英語の分裂文の焦点の位置には一つの要素しか生起しないとされていたが、一定の条件のもとでは複数の要素が焦点位置に生起できるという現象を、鈴木さんは Rizzi, Cinque らの提案する referential, non-referential という素性を用いて、共に referential な要素の場合、素性レベルで absorption がおこり結果的に多重焦点が許される

とする。一方、日本語の場合も分裂文の焦点位置に複数の要素が許されるが、日本語の場合は英語の場合と違って scrambling と adjunction によっているとする。

以上の理論的基盤に立ってレベルの違う日本語母語話者 124 名を対象に実験を行い、初級と中級における英語の多重焦点をもった分裂文に対する文法性の判断の違いから、初級段階・中級段階ともに日本語と同様の scrambling を適用しているが、中級になると CP SPEC には一つの要素しか生起できないという英語のメカニズムを用いていると考えられるとして、第 2 言語習得における第 1 言語の影響と、中級レベルにおいては第 2 言語のパラメーターにリセットされている点を明らかにした。

根拠としている referentiality や absorption という概念についての説明と検証にやや不満が残る点、比較として検討されている WH 移動についてもさらに考察する必要がある点、また分裂文の多重焦点そのものの性質等について今後さらに考察を深める必要がある点など、改善の余地はあるものの、当該の理論において分裂文についての研究がまだほとんど行われていないという点で、本論文は先駆的なものといえることができる。また、理論的考察の部分と実験による検証の部分とのバランスもよく、その論証も一貫していて破綻が無く、よくまとまった論文になっており、当該の分野の知見に対して十分な貢献をなすものである。

よって、本論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分価値のあるものと認められる。